

文 学 と 医 療

【単位数: 1単位, 授業13コマ】

1 科目責任者

橋本貴宏 教授(特任)(数学)

科目担当者

稻垣広和(非常勤講師)

2 教育目標

(1) ねらい(I-2-c)

- ① コンピテンスである「プロフェッショナリズム」の「他者の多様な価値観を尊重できる」ようになるため、文学の視点を通して学ぶ。
- ② 文学を学ぶことによって、日本の文化的特質や言語表現の特徴などを学ぶ。それによって他者の多様な価値観を知ると共に一人の社会人として教養を身につける。
- ③ 文学作品を理解することによって、読解力を身につける。加えて豊かな人間性を涵養し、さらに社会的視野を広げると共に将来社会人として必要な学術文化の知的蓄積である教養の有用性を理解する。

(2) 学修目標

- ① 文学テクストの基本的な構造を理解し、読解することができる。
- ② 文学テクスト及びそのコンテクストについて関係性を認識し説明することができる。
- ③ 文学テクストに描かれた医療アイテムを弁別した上で、社会通念としての医療に対する認識を説明できる。
- ④ 文学テクストに対する感想や自己の意見を音声言語表現を使って説明することができる。
- ⑤ 文学テクストに対する感想や自己の意見を文字言語表現を使って文章化することができる。

3 成績の判定・評価

(1) 総合成績の対象と算出法

成績対象	割合	方法・コメント
小テスト	○ 100%	講義毎に講義課題(600字以上)を作成し、AIDLE-Kの課題ボックスに提出。それらを得点化し、受講態度等を加味した上で総合的に評価を行う。 定期テストは行わない。各講義の課題期限内に講義課題を提出することで出席とする。3分の1以上課題不提出の場合は、単位認定をしない。 出席点はなし。
態度	○ 一	受講態度が著しく不良の場合は、10%を限度に減点をする。

出席: 単位を修得するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

(2) 合格基準

評価対象の合計が60%以上(又は60点以上)で合格とする。

(3) 再試験・再評価の方法

評点が60%未満の場合は、再試験を1回に限り実施する。再試験はレポート作成の上、口頭試問とする(評価100点満点の60点以上で合格)。

(4) 課題（試験やレポート）へのフィードバック

講義課題に関しては、クラス全体の感想・意見・質問を取りまとめ次講義時に紹介・解説を行い、情報の共有化を図る。

また学生からのさらなる質疑及び説明の希望があれば、後日解説の機会を設ける。

講義6回の時点で受講生の得点状況に関して説明を行う。単位取得が懸念される受講生に関しては個別に連絡をする場合もある。

4 教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
「海と毒薬」	遠藤周作	新潮社	遠藤周作の文学テクスト（「海と毒薬」）を通して文学と医療倫理、医療哲学、医療文化史等との関係性を学修できるだけでなく、基本的な読解力を学修するのに適しているから。

5 参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
小説の処方箋—小説にみる薬と症状	二瓶浩明 他	鼎書房	文学テクストに描かれている病気及び薬に関して文学と医療の両面からアプローチの方法をわかりやすく示している。
小説で読む生老病死	梅谷 薫	医学書院	「生老病死」というキーワードをもとに現役の医師が対人援助職のために「小説の読み方」を示したものである。

6 準備学習（予習・復習）

- （予習）AIDLE-Kにアップロードした各講義回の講義資料を通読する（1コマあたり約0.5時間以上）。
- （予習）講義資料で不明な用語や事柄について事前にインターネット等で調べる（1コマあたり約0.5時間以上）。
- （復習）講義後は講義内容を確認し、疑義及び講義の要点をノートにまとめる。それをもとに講義課題を作成する（1コマあたり約1時間以上）。

7 授業計画

（1） 講義の方法

基本的には知識伝達型の講義方法をとるが、「文学」という学問の性質上、受講生が一方的に講義内容を覚え、それを定着すれば良いといった講義ではない。講義中の教員との質疑応答や、講義毎に行う講義課題を通して、インラクティブな講義を行う。

また、講義の中に受講生が発見した問題に対し小グループでの議論をしたり、教室プレゼンテーションを行うことによりアクティブ・ラーニング型の講義を行うこともある。

（2） 講義の内容

初回ガイダンスは講義の全体像を示すとともに、受講のルール等を説明する。初回ガイダンス以降は遠藤周作の「海と毒薬」を中心としたテキストとして、作品内容や文学全般に関する色々な検討課題について教員の解説や映像視聴及びグループディスカッション等を行い、作品内容の理解を深めていきたい。

またこの講義は単なる文学作品読解を主たる内容とするのではなく、多くの学問分野との関連性や学際的分野についても扱っていく（例えは歴史や文化、思想など）。